

特集 「創設 30 周年記念特集—歴代会長随想—」

永遠の青年学会で あるために



第 11 代会長 溝口 理一郎

(北陸先端科学技術大学院大学サービスサイエンス研究センター)

30周年おめでとうございます。この機会をいただいて、対立する二つの側面とその両立という問題に関する私見を述べさせていただきますと思います。

昨今の AI ブームはまことに喜ばしいことではありませんが、それに対して「うまく」対処することが最も大切かと存じます。対処法には大きく二つあります。最初の対処法は言うまでもなく、できる限り関心の高まりに乗じて、それに即した研究を大いに促進することですが、もう一つは、いつかは終わるブームのことを真摯に捉えて、ブームに左右されない王道を歩くことです。学会としては、この二つの両立をお考えいただきたいと思います。

二つ目の両立問題は、攻めの姿勢と守りの姿勢です。偏見かもしれないのですが、最近の研究者は一部の例外の方を除いて、守りに入っている方が多くなっていると感じてなりません。もっと、おおらかで、自由闊達な攻めるタイプの研究者が多くなることを期待します。能力ある青年が、将来を独自の視点で見通して、自由で面白い研究をするという精神が薄れつつあるのではないのでしょうか？ その兆候は、企業や大学などに限らず、編集委員会にも見ることができるようになります。編集委員会は会員が書く論文の採否を決定する権限をもっています。これは非常に大きな権限です。そしてそれは、会員の研究を生かしも、殺しもするという重大な決定権であり、学会の研究の在り方に大きな影響を与えます。ルールに従うことを最重要規範にすると、自由で枠に収まらない研究をつぶすことにもなり得るということに気付かないだけではなく、ルール至上主義が最善の方法であると信じておられる方が多くなっていることを危惧します。そう、守りの研究者です。本来、編集委員会は各委員の「見識」で成り立っているべきものだと思います。

見識をもっていない人は、既存のルールに従うことを唯一の行動規範とする傾向があります。自らの見識で、枠を破ることも辞さない姿勢が必要ではないでしょうか？

本学会が永遠の青年学会であってほしいという心はここにあります。青年の長所は既存のルールを守ることにあるのではないはずで、それは、既存の枠組みを、やむにやまれず超えることを希求する熱い心にあるのではないのでしょうか？ AI 研究は「熱い心」でやっていただきたいですし、編集委員はその熱い心を「理解できる」感性をもってほしいと思います。ルールを最重要視する人は、熱い心が死んだ人です。守りに入った研究者です。そのような人が蔓延したら人工知能学会は魅力がなくなってしまいます。

そうは言っても、編集委員全員が枠を破っているようでは混乱を招きます。ですので、この背反する姿勢を編集委員会内で両立させることが重要になります。そしてその両立を促し、調整する役目は編集委員長をはじめとして、会長や理事会にあると思います。

以上、私見をあからさまに申し上げましたが、本学会が次の 10 年、20 年と「青年学会」としてさらに発展し、会員の熱い AI 研究を適切に牽引、促進する役目を果たされることを期待しております。

著者紹介

溝口 理一郎 (正会員)

1977 年大阪大学大学院基礎工学研究科博士課程修了。同年、大阪電気通信大学工学部講師、1978 年大阪大学産業科学研究所助手、1987 年同研究所助教授、1990 年同教授、2012 年 10 月北陸先端科学技術大学院大学サービスサイエンス研究センター教授、2014 年 4 月同特任教授、現在に至る。工学博士。パターン認識関数の学習、クラスタ解析、音声の認識・理解、エキスパートシステム、知的 CAI システム、オントロジー工学の研究に従事。2006～07 年度本学会会長。